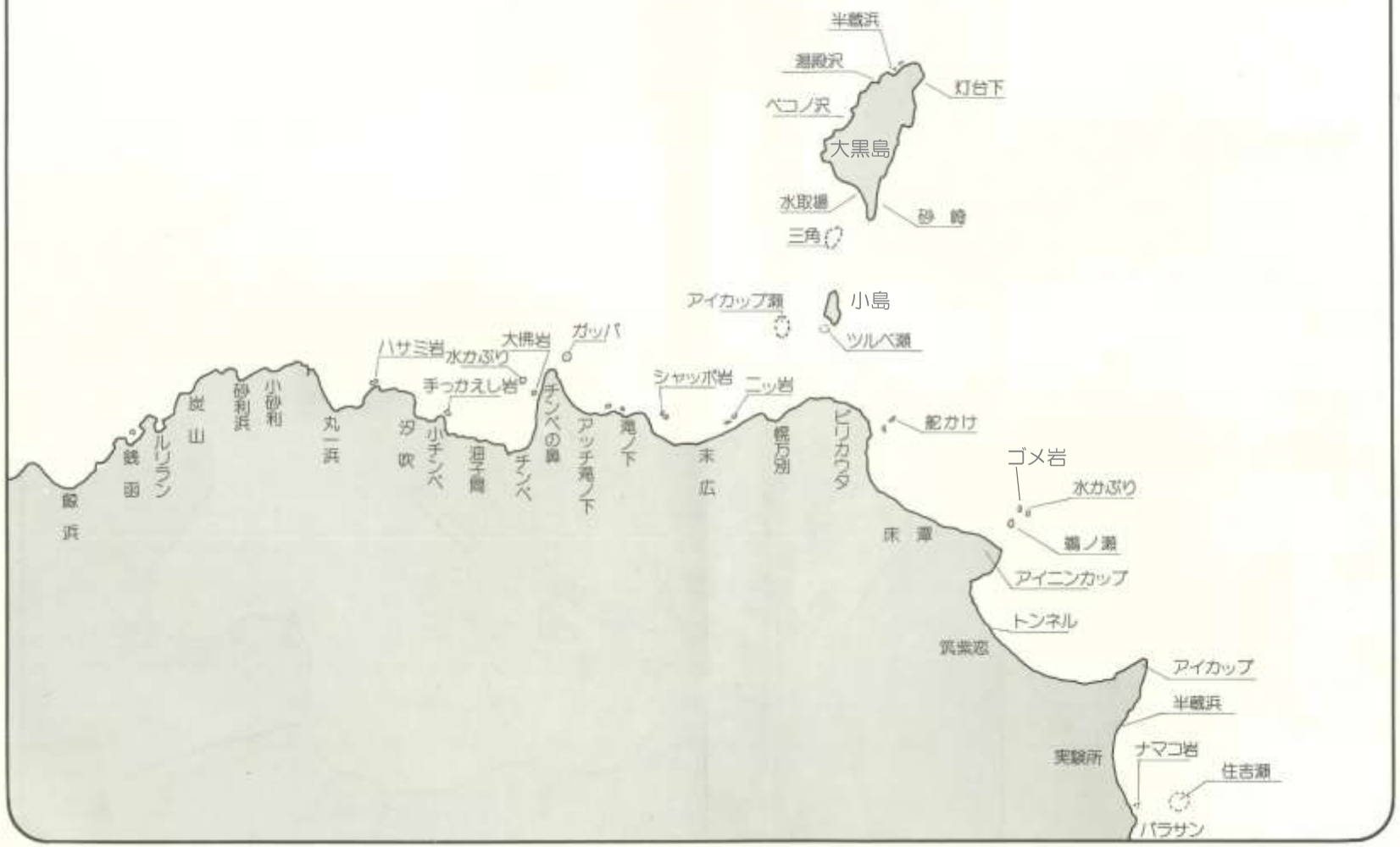
＜資料２＞　海岸線の俗称及び地名

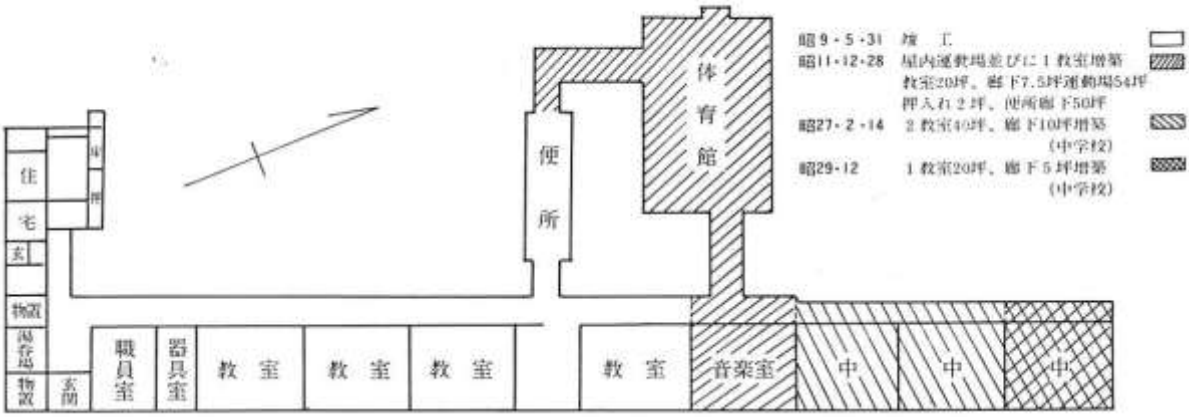


＜資料３＞　床潭地区地形図及び当時の番地

＜資料４＞　床潭小学校開校80周年「八十路の歩み」より

床潭小学校下校見取図（昭56）

床潭小・中学校平面図　（昭和9･5･31～昭36･9･25日）



＜資料５＞　昭和27年当時の生活について

（高畠キエ氏（大正１５年（昭和元）生まれ）の個別聞き取り調査による（2018年）

▮当日の家族構成と状況

高畠家は、当時、馬を使って運送業をしていた。馬を何頭も飼っていたが、津波で馬が流され、昭和27、28年くらいに、トラックに切り替えた。

　津波当日は、お父さん（ご主人）とおじいちゃんと若い従業員とが、馬に荷物を積んで、町に出ていた。おばあちゃんは、その朝、町へ用足しに出て家にはいなかった。家には、私と娘、それとお父さんの妹の３人だけだった。

最初の地震が来たとき、自宅の家具類や廊下に積んでいた町に運ぶための米俵などがみんなひっくり返った。私は子供を負ぶって、片づけていた。そしたら、二回目の地震が来た。すると、家の前のばあちゃんが「津波、来るぞー」か、「来たぞー」か、何かを叫んだのが聞こえて、それで慌てて逃げた。

着の身着のままで逃げた。モンペのようなズボンをはいていた。ちょうど、子供を負ぶって家の中を片づけていたからよかった。おばあちゃんも町の方に出ていたから、もし、おばあちゃんが家にいたら流されていたかもしれない。私と妹と二人だったからよかったのかもしれない。

こっちの方（旧床潭小学校横）に、小さい橋が架かっているが、その橋を越えて、後ろを見たら、もう家がなかった。波がサァーっときた。私たちは、膝のあたりまで濡れた。大した大きい波でもなかったけど、そのあと、大きいのが来たんだと思う。

よく助かった。私の後ろで、近所の家族が流されて亡くなった。その人は歩けなかったから、負ぶってもらって逃げてきた。私が橋を渡ったら、「ワァー」って声がした。ひょいっと後ろを見たら、その人が流されていなくなっていた。

▮当日の食事

昼に家族の人が、仕事から戻って来るので、食べさせようと思って、朝、ジャガイモの皮を剥いて、火にかけてゆでていた。当時、ルンペンストーブだったので、その上にかけていた。そしたら、まだ炊けないうちに地震が来た。一緒に住んでいた妹が、火事でも出したら困ると思って、ルンペンストーブをかかえて逃げ、近くの川にガァーと投げたことを覚えている。

普段の食事は、やっぱり、働いている人はご飯だった。津波の時は、ジャガイモでも茹でて食べようと思っていた。茹でたジャガイモは何にもつけずに食べたり、バター付けたりして食べた。当時、バターは手に入った。

普段の朝は、ご飯を炊いて、みそ汁作って、魚焼いて食べたりしていた。

ニシンがとれていた。三月だと春ニシンがとれた。トラックのない時代は、馬に積んで、奔渡（厚岸町内）の市場に持って行った。重労働だった。保存方法としては、ニシンやサケなどは、塩蔵だった。床潭周辺は、助宗（スケソウダラ）などをとっていた。魚には不自由しなかった。

生活水は、井戸があった。うちの前に井戸があったが風呂の水や馬の水として使っていた。飲料水としては、郵便局の近く、西村さんの家の角に井戸があり、そこまで汲みに行った。水を汲みに行くのは、子供の仕事だった。

▮生業

昭和24年に嫁いできた時には、現在の家周辺は畑地が広がっていた。作物は、じゃがいもや大根、カボチャなど。自分たちで食べる分は、育てていた。

▮当日の衣服

和装ではなく、洋服だった。子供を負ぶっているときなどは、その上から角巻をまいたりしていた。私は、ズボンをはいてセーターを着ていた。当時はズボンもモンペも両方はいていた。小学校時代は、やっぱりズボンをはいて、セーターを着ていた。

昭和２７年頃は、靴や長靴は普通に履いていた。（津波の時）逃げるときは、ただ、子供を負ぶって、そのままで逃げた。はだしではなく、靴をはいて、セーターを着て。

▮当時の住宅

家は、二階建ての作りだった。二階に部屋が四つくらいあった。八畳の部屋一つに、あと六畳の部屋などがあった。若い従業員を一人雇っていて、その他、お父さん（ご主人）の弟と妹が同居していた。一階には、私たち夫婦の部屋と、おじいちゃんとおばあちゃんたちの部屋や、台所と居間があった。全部で五つぐらい部屋がある、大きな家だった。

▮その他

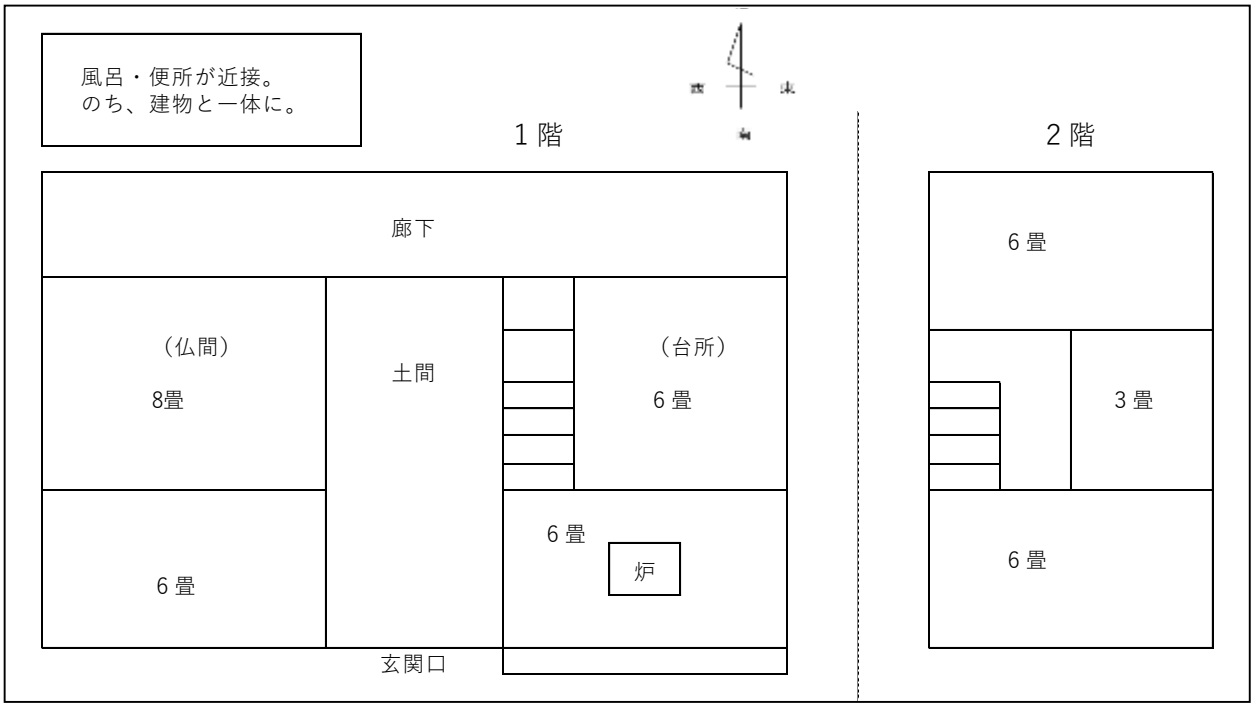
私が嫁いできたときは、西村さんの隣に床屋があった。床屋は、当時この一軒だけだった。

床潭にあった商店は、住吉さん、稲葉さん、高畠さん、宮下さんがあって、その他にも小松さんがあったと記憶している。町に出なくても、結構買い物には不自由しなかった。

また、家のおじいちゃん（ご主人の父親）が、お酒を飲む人だったので、床潭から町に向かう途中に茶店みたいなものがあった。床潭沼から上がった山の端っこ辺り。酒でもなんでも売ってた。昔、うちのじいちゃんは、厚岸から荷物を積んでくると、馬を茶店の前において飲んでいると、馬がとことこ、自宅まで歩いて帰ってくる。この茶店は越後茶屋（えちごぢゃや）と言って、昭和３０年代くらいまでやっていたようだ。

お店の大きさはちょっとした家くらいあった。労働者が相手だから、靴はそのまま入るようにして、土間みたいだった記憶がある。町から歩いて帰ってくると、その店に寄って何か買って帰ったもんだ。

■当時の高畠宅の間取り



税金は　復興へ　建設へ

町報あっけし

昭和27年3月15日　発行

発行所　厚岸町弘報委員会
厚岸郡厚岸町大字梅香町　厚岸町役場内
編集人　発行人　佐藤　五后
印刷所　阿寒郡雄別炭山旭町一丁目
厚岸印刷所雄別工場　田畑圭司郎

十勝沖地震に因る災害復興に際して

厚岸町長　岸田利雄

天災とは申し乍ら去る四日突如発生致しました十勝沖地震に因る本町の被害甚大でありまして死傷者始め罹災の方々には誠にお氣の毒に堪えない次第であります。然し乍ら今次の災害は本町ばかりでなく各地に発生して然も凄惨の状況を極めて居りますので町全体が出来ました事は不幸中の幸とも申されるのであります。

天災とは申し乍ら去る四日に順調に行い得ましたが協力を煩はしました方々に深く感謝致しておるのであります。應急措置の落付き次第町議会により決定せられ策本部其の他関係團体等一体となりまして恒久対策を立致しまして着々復興計画遂行に努めつゝある次第であります。

何よりも先ず住宅を得ると同時に生業復興が緊急事であります。

幸い今次震災害対策については政府も特に復旧対策に関し機関を設置して事急致しつゝあります。

共に北海道においても勿論漁業團体金融機関等におきましても深い眞心を以て復旧の爲に盡力せられておりますから早期に生業復帰が期し得られるものと確心致しております。

罹災の皆様には決して落胆することなく愈々復興生業確保のために努められます様希つて止みません。

玆に町報紙上を借りまして尊い生命を犠牲にされました死者の御冥福と傷者の快癒を祈り義捐金品醵出の方々及び御見舞を忝うせられた方々多数に対しまして萬腔の感謝の意を表しますと共に今後の復興のために更に関係方面の格別な御援助を特にお願い申し上げる次第であります。

津波床潭をのむ　死傷者二十名！

家を失い不安と寒さにおびえ　しんさいの夕日は今日も超えてゆく

×四日午前十時×
×二十五分ごろ×
×から數分にわ×
×たり襟裳岬南×
×方海上東経一×
×四三度三分北×
×緯四一度五分×
×を震源地とし×
×て東北海道東×
×部沿岸を中心×
×に上下動を伴×
×う強震をして×
×津波が襲い床×
×潭を中心にそ×
×の惨事は刻々×
×と拡大してい×
×った

稀有の地震はレンガ建内壁を破りストーブを倒し火然として屋外に避難して見つめる一瞬の出來事であった。

落付きを取もどし屋内の整理に取りかゝろうとした午前十一時五分水平線を奔馬のように襲い狂う津波は一物もまとめる暇さえなく小高い岡を目指して逃げながら泣呼ぶ避難民の中からわが子兄弟を探し求めたが岡から見下せば黒い水中に沈し渦巻く海潮を見つめて不氣味な時刻けたつてゆく……

町では役場町警消防通信機関が協力して八方に連絡をしようとしたが眞龍との電話線さえ切断され報導、治安機関の連絡は断たれ孤立の形となり辛うにて床潭と連絡を保つていた。床潭局長の「これが最後の通信として避難しなければならない」との電信以來全く杜絶した。

津波の去つた後床潭に出張中の役場吏員からの被害第一報は死者行方不明重傷者十數名流失家屋の磯認されたものだけで十數戸の多大の數が判明した。そして午后二時半頃漁業者の漁業用無電器により津波警報解除が傳達された。

救援の医療班食糧補給の役場吏員十數名及び鎮圧安定のために町警消防團員四十余名が床潭部落に急行した漁業協組施設木材

人命と財産を一瞬にして　うばつた　大自然の力は　唯恐怖が背すぢを走るばかり

恐怖と失つた家に帰ることの出來ない罹災者とが小高い岡に不氣味な一夜をあかした

白原を灰色に染め屋根、船の間をぬつて調査は進められ、その状況は予想もつかないほう大な被害として三月八日発表されたが、その後一部訂正されたが三月十日現在まで判明したものは

死者
小松英子(三才)小保田喜三郎(二五才)内田
重軽傷者　十八名

財産の損害

船舶

区分	損害額
動力船	三、七四五千円
無動力船	三、三五千円
延縄	四八、三四三千円
副漁具	六、四〇〇
その他	七、八〇
合計	三、六二九

水産製品

区分	損害額
昆布	三、四四四千円
かき	六、八〇五
その他	一〇、一三九
合計	三、六二九

漁業協組施設

区分	損害額
家財具	六、八〇〇千円
木材	四、九三五
薪炭	一、一三六
炭がま	三、九六〇
尿溜(農業)	二〇〇
サイロ	一〇、〇一二
教育施設(学校など)	
公共土木施設	四、八〇〇
その他	一、一〇〇
公共施設	三、四四〇
家屋	五、〇〇〇
商工業関係	三、〇〇〇
合計	二八四、三四〇

痛々しい現場

中央政府などに反映

稀有の災害は各方面のびこれに罹災所民として希同情と対策のために眞剣に望を訴え東坂のために陳情論議されているが調査の請願した概要次のとおりでためにに來町した主なる者及ある

月日	來町者	陳情請願事項
三六、三	松田衆議院議員　二瓶	全般に亘つて陳情
三七	野田建設大臣（浜中にて）	上水道、菊地小学校復旧方について
三八	伊藤衆議院議員　二瓶	右仝じ
三九	山添農林次官	漁業復興資金融資方について
三九	坂井道教育委員	学校の被害復旧方に付て
三一〇	畠林省漁港課長 道港漁課長 釧路土木現業所長 開発局計画課長	漁業復興資金融資方 公共事業復旧方 生業資金融資方
三一〇	高倉、飯田、林衆議院議員　松浦参議院議員	漁業復興資金融資方 住宅復旧方 學校等の復旧方
三一	廣瀬参議院調査團（一行十七名）	漁業復興資金融資方 公共事業復旧方 住宅復旧方 學校等の被害復旧方
三一三	衆議院議員調査團（一行十名）	右に同じ

三月六日緊急議會

ふつこう対さく計画成る

三月六日厚岸町議会を緊急招集し、未だ恐怖からさめず混乱の現地床潭村に開合した。

対策上特に罹災者の声として意見を求めれば、船と家あたゝかい布どん等々その切実な希望は三日二晩不氣味におのの寒さと餓に波労した痛ましい姿であつた。

議事の焦点は不自由ながらも生業に励んで貰うための対策にかゝつてあつた。

直ちに具体的計画実行のために議会側及び町民の代表機関から委員を選任した。

議会側
久田議長　安部副議長
西村議長　長崎議員
西田議員　堤議員
水口議員　大笹議員
関係機関代表　村上忠次
阿部庄太郎　室伏見正
瀬田松蔵郎
中島喜作
これら第一回対策委員会が三月八日役場会議室で更に三月十四日役場会議室で開会され夫々別項の計画を決定実行に努力している。

たつた今までのわが家はそしてあたたかく燃えたストーブの煙突も恨めしく痛々しい惨状のあと

仮設住宅

建築工事進む

予期せぬ震災は一瞬にして住家倉庫納屋を流失全壊し生壊大破は材料聯旋により三月六日から補修工事に取かゝつていたが全壊流失の世帯に対しては應急の処置として二十戸（一戸六坪で十万円）を建築することの方針をもつて拓殖銀行を通じ融資を受け來庁中の道建築課及び支庁建築主事指導の下に請負者一名菅原建築株式会社を現場に駐在させ建築にとりかゝり着々木の香も新しく修事一色にぬりつぶした床潭部落に新生がよみがえりつゝあるなおこの資金は国費全額補助を導入して行はれるのである

罹災者に義捐金

波に漂う屋根、舗を流し去り食も衣料用品さえ波に存れただ悲惨な目にあつた氣の毒な罹災者へと町内外の有志から温い救の金品が贈られている。

一、〇四〇円　湾月町々民

兩陛下から御下賜金

天皇皇后両陛下には此の度の十勝沖地震によつて蒙つた災害復興に深く御心を痛められ御内帑金を御下賜になり三月十四日佐藤助役が釧路国支庁長から傳達授受し速かな復興に努力して御心に副うべくお答へした。

（三月十二日現在）

合計　五六八、四三五円

長

謝罪災御見舞

今次の災害に際し迅早く御見舞激励を忝う致しました。更に多額の義捐金品も有難く受納配贈致しつゝあります一々拝趨御禮申上げるべきでありますが仮復興其の他に忙殺の現況でありますので甚だ勝手ですが本紙上からとりあへず御厚禮申上ます。尚桃さい者一同至極元氣復興に努めつゝありますから御休心願います。

昭和二十七年三月十日

厚岸災害対策委員会
災害復興対策本部

三〇〇円	若竹町々民
七〇〇円	松薬町々民
一、四〇〇円	新富町々民
一、四〇〇円	浜波町（西部）町民
四、九〇〇円	弁天町（東部）町民
二、〇〇〇円	眞龍町（東部）町民
二、〇〇〇円	眞龍町（中部）町民
五、三〇〇円	眞龍町（西部）町民
二、〇〇〇円	金子定吉
一、〇〇〇円	厚岸鶏令会
三、〇〇〇円	筑紫恋婦人部
一、〇〇〇円	厚岸料理飲食麺類連合会
三〇、〇〇〇円	厚岸小學校
一、〇五〇円	北海タイムス社
一、〇〇〇円	筑紫恋部落
一、〇〇〇円	高橋哲弥
一〇、〇〇〇円	留崩町　武田　昇
一〇、〇〇〇円	釧路市日本ウメノナイト教会
六、〇〇〇円	眞龍婦人会一同
八、三〇〇円	眞龍町商店連合会

十勝沖地震に因る 災害復興計書

厚岸町　災害復興対策本部

一、住宅ふつこうイ非常仮設住宅四棟三〇戸　二、〇〇〇千円
(ロ)公営住宅　四〇戸　三二〇坪　一、六〇〇千円
(ハ)住宅修繕　四〇戸　六〇〇坪　六、〇〇〇千円
二、生業ふつこうイ漁業緊急ふつこう資金　五、四〇〇千円
ロ納屋建上げ三〇棟　五、四〇〇千円
(ハ)商業者ふつこう資金三〇件　三、〇〇〇千円
(ニ)工業者　〃　七件　二、一〇〇千円
(ホ)炭業其の他　〃　二、〇六〇千円
三、共土木施設ふつこう
(イ)道路二本　四〇〇米　二、四〇〇千円
ロ)橋梁二ケ所　四〇米　二、三四〇千円
(ハ)港湾四ケ所五九五米　三五、八三〇千円
(ニ)上水道二ケ所　二、二〇〇米　七、四〇〇千円
(内国費二、〇〇〇千円　道費二、四〇〇千円
町費三三、三八〇千円　起債補助
四、學校等施設ふつこう旧
(イ)菊地小學校外九件　一〇、七四三千円
五、其の他の対策
1災害救助法に基く完全救助の実施
2罹災失業者対策土木事業の実施
3法外救助救済の実施
イ義損金品の募集配分実施
4適正な生活保護法の適用実施
以上は三月拾参日計画樹立のものであるが何れも資金がふつこうの根幹を為すものであり其の獲得が先決問題であつて非常住宅は国費又は道費の全額助成
○住宅は町費負担分金額起債生業資金は長期融資
○共学校等施設ふつこうは補助と起債を全面的に融資せらるゝ様方針を堅持して遂行しようとしている

十勝沖地震厚岸町災害復興対策本部設置要綱

一、目的　十勝沖地震厚岸町災害應急救助は時間的に其の対策一段落の段階にあるが本災害をして速かに然も恒久的なふつこうを期する爲に本厚岸町災害ふつこう対策本部を設置せんとする
二、組織　本部に次の部を置いて部長が本部長の指揮によつてふつこうの速進を期する
部名　部務の概要
一、災害調査取纏め及びふつこう計画に関する事
二、部外との連絡に関すること
三、各部の調整に関すること
四、ふつこう費予算に関すること
五、厚岸町災害対策委員等に関すること
六、他部の主管に属しないこと
総務部
救恤部　一、災害救助法の運用に関すること　二、救援物資法外義損金品に関すること
生業対策部　一、罹災者生業資金資材の確保に関すること　二、被害商工業者の更生対策に関すること
ふつこう建設部　一、公共施設ふつこうに関すること　二、罹災者住宅対策に関すること
本部職員の編成
本部長　岸田町長
副本部長　佐藤助役　戸田収入役　矢本税務課長
総務部長　高橋総務課長　救恤部長　加賀厚生課長
生業対策部長　関川産業課長
復こう建設部長　加藤建設課長
外　各課員
四、本部はさい害ふつこうと本来の役場事務とを併せ行うもので役場機構に準じて編成す。依て両者共に遺憾なきを期して以てさい害ふつこうの速進を期するものとする尚税務課員支所職員は隨時臨機に本部の業務を担任する
（昭和二十七年三月十日施行。）

おそろしい日

床潭小六年　中村キヨミ

あの日、三月四日はとても暖かい小春日よりでした。誰があんな大きな恐ろしい地震と津波が來ると考えていたでしょう。ちょうど一時間目が終つた十時二十分頃突然ぐら〜と地震がきました。たいした事が無いと思ったその時つづけさまに歩けない程の地震がきたのです。お友達は皆きやきやと言いながら逃げました。大丈夫だとゆう先生らしい声も聞えましたが、学校が今は倒れるか、今倒れるかと思つて靴もはかずに夢中で飛出しました。校庭に出てからも、暫く校舎がゆれてたので私はすつかり、大きな學校がゆれているのを見ました。今考えてみてもこわくなります。校庭に出てからの地震が終つたのでて親せきの家に行つて山に逃げました。その家の中で寝る事も出來ず山に小屋を立てて避難しました。寒い寒い夜でした。私はお友達の事を考えてみながら知らず知らずの中に寝てしまいました

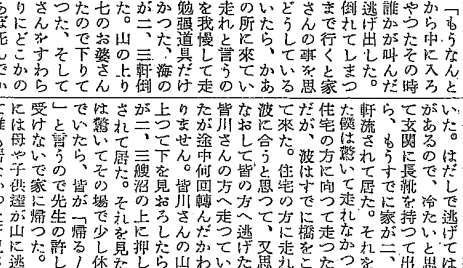
只メチヤ　メチヤという言葉に盡きる　誰が数分の出來事として想像されようか

地震と津波の思い出

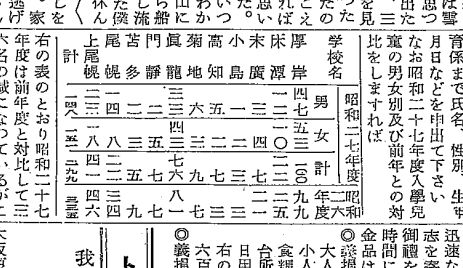
床潭小四　菅谷健造

二時間がおわつたので、僕は靴下をぬいで、足をあぶつていたら急にがたがた〜と音をたて動く、それは地震であつた。その動き方は、突然地震がやつて來た。僕の後の磯田君に「地震でないか」と聞いた時はもうすでに大きな地震であつた。窓から飛降りたが地震は益々大きくなつた。僕は家に歸ろうと思つて歩いたが、地面が大きくゆれて少しも歩けなかつた。そのうちに地震も弱まつていつたので、先生方と地震の話を色々と話し合つて居たら、窓から飛び降りようと思つて窓に上つたら、すでに校庭の近くに津波がやつて來ていた。はだしで逃げては駄目だ。僕は靴を持つて出たら、もうすでに家が二、三軒流されて居た。それを見た僕は驚いて走れなかつた。住宅の方に向つて走つたのが、波はすでに家の二、三軒流されて居た。住宅の方に走れば波に合うと思つて、又思い出して今頃どうしているのかと思つていたら、かあさんが火葬場の所に來ていた。皆が走れ走れと言うので、こわいのを我慢して走つた、だけど勉强道具だけは、はなさなかつた、海の方を見たら家が二、三軒倒れたようだつた。山の上り口に家の八十七のお婆さんが來ていました。そして上つた、そしてお婆さんがすわらせた。その隣りにどこかのおばさんが「あぶ死んでかわいそうだなあ」と言つていた、うちのかあさんは「家の様子はまだ知らないようだつた。兄さんが本当に氣の毒だねえ」と言つて、僕と二人で家の中をもどりました。家の中はめちゃくちゃでした。障子は倒れ、壁はちこちに流れて布團も蒲物も食物も皆家の隅の方にかたまつています。勉强道具はと思つてお母さんを見ると何も言わずに氣の抜けたもの思いをしていました。私はどうなるのかと思うとても悲しくなりました

夕方になつてお母さんと家にきてみると外はなんともないが中はめちゃくちゃでした。障子は倒れ、壁はちこちに流れて布團も蒲物も食物も皆家の隅の方にかたまつています。勉强道具はと思つてお母さんを見ると何も言わずに氣の抜けたもの思いをしていました。私はどうなるのかと思うとても悲しくなりました



「きよみ」「きよみ」と呼んだので振りむくとお母さんが來ていました。お母さんも靴をはいていませんでした。私はどうなるのかと思うとても悲しくなりました



てくれたので僕はうれしくて、うれしくてたまらなかつた

急ごしらえした小屋があちこちに出來はじめました

災害に寄せて

床潭中二年　多田武義

三月四日、丁度時間は十時二十五分頃でした。僕等が數學の授業をしていた時、突然地震がやつて來た。僕の後の磯田君に「地震でないか」と聞いた時はもうすでに大きな地震であつた。僕は家に歸ろうと思つて歩いたが、地面が大きくゆれて少しも歩けなかつた。そのうちに地震も弱まつていつたので、先生方と地震の話を色々と話し合つて居たら、窓から飛び降りようと思つて窓に上つたら、すでに校庭の近くに津波がやつて來ていた。はだしで逃げては駄目だ。僕は靴を持つて出たら、もうすでに家が二、三軒流されて居た。それを見た僕は驚いて走れなかつた。住宅の方に向つて走つたのが、波はすでに家の二、三軒流されて居た。住宅の方に走れば波に合うと思つて、又思い出して今頃どうしているのかと思つていたら、かあさんが火葬場の所に來ていた。皆が走れ走れと言うので、こわいのを我慢して走つた、だけど勉强道具だけはなさなかつた、海の方を見たら家が二、三軒倒れたようだつた。山の上り口に家の八十七のお婆さんがすわつていたので下りて來て連れて上つた、そして良い所におばさんがすわらせた、その隣りにどこかのおばさんが「あぶ死んでかわいそうだなあ」と言つていた。なお昭和二十七年度入學兒童の男女別及び前年との対比をしますれば

学校名	昭和二十七年度 男	女	計	昭和二十六年度
厚岸	四七	五三	一〇〇	二〇二
末廣	一一〇	一〇二	二二二	二九九
床潭	一一一	一一一	二二二	二二二
高知	一一一	一一一	二二二	二二二
小島	一一一	一一一	二二二	二二二
菊地	五六	四七	九七	一七
眞龍	三三	三三	六六	一一
門静	四三	三三	七六	七七
多苫	二二	二二	四四	四六
上尾幌	一一	一一	二二	二二
計	一四八	一五五	二九九	二三五

右の表のとおり昭和二十七年度は前年度と対比して三人の減になつたが昭和二十八年度から漸次増加されるものと思われる

岸田町長出札

今次罹さいの状況説明と今後のふつこう対策に関する意見は十五日札幌市に出発前関係道議会開発局等にふつこう計画陳情十八日釧路市において開催の町村会に出席した。

入学通知

洩れの方は

至急役場へ申出下さい

昭和二十七年度新入学期も近づいて來ましたが家庭では準備はもつよろしいでせうか。今年入學する該当者には個人別に入學案内をいたしましたが通知を受けていない方は至急役場激泣されて氏名、性別、生年月日などを申出て下さいなお昭和二十七年度入學兒童の男女別及び前年との対比をしますれば

◎義損品
大人衣類八一〇点
小人〃　七二六点
食糧品　一九三点
合所用品二、五一一点
日用品　九八点
右の見積概算　二九万六百三十円
◎義損金　二九、〇〇〇円

トピック

我に十四才の歳 再びあらんや

—德川頼宣—

大阪夏の陣に、紀州頼宣が出陣した時、戰は既に終了して皆引き上げていた。頼宣は家康に向い『今日の合戰に後れたのは実に口惜しうございます』と云つて頗りに落涙したので、傍にいた松平正綱は『紀州様の御嘆きは尤もであるが、お年が若いのだから、今後御手柄をなされる時が沢山御座います』と云つて慰めた。すると頼宣は『正綱は不思議なことを云うぞ。我に十四才の歳が再び來るか』と叱つたので、家康は『おうその一言こそ今日の一番槍にも優るぞ』と称讃した

× × ×

フランクリンの言葉にこんなのがあつた

『人生を愛するか、若し愛さば時を浪費するなかれ、時は人生を成す要素なればなり』

× × ×

時は正に三月……
世に送られる卒業生諸君よ寸時も怠にするなかれ

× × ×

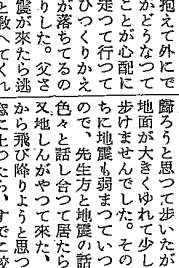
青年よ、時を惜しめ

募集

しんさい害罹さい者に應急葬損品の

悲惨目をおう床潭部落を主とする罹さい者に一刻も早やく衣料と家財を與えるために緊急民生委員会を六日午前役場当直室に開会直ちに行動開始することに決定全日正午から本町眞龍町を中心に所属民生委員を長として有志約百名の勢力を得てそれ〴〵担任区域を定め一方住民に此の旨を周知して午後五時過ぎ〴〵切り厚岸公民館に集積して荷造同夜半現地に送ず衣料一台を送り込み翌日民生委員救助本部員の手によつて続々輸送に配分に努めたが衣料にしても食器等台所用品にしても世帯や家族の構成に合致しないものもあつたかも知らないが大きな喜こびに感泣される罹さい者にあつて迅速な罹さい行動に感謝されたし志を寄せられた町民有志に御禮を申し上げたい。尚數時間遅して醵出された善捐金品は次の通りであつた。

◎義捐品



突如として悲惨な予測できない恐ろしさ　これが天さいという本当の意味であると昆布と塩の香る悲惨な現場に立つて感ずるばかりである

◇

海潮がどす黒い白原の上に痕跡を殘して形をとどめなく流した屋根、船、家財其の他が朱然とほどこす術すら見えない程に荒れ狂つた二日三日……今は建設の槌音も高くちぐはぐな建て方とはいえ自からが立ち上りに光と笑がみえ始めた

◇

誰か言う「命さえあれば……」惨禍の後につきがちな動倫も秩序も失われ頽落と頽廢が自滅へ導く幾代もの汗で築いた財産それは何ものにも替え難い傳統の財宝である　これを再び生かすものは力强い自立である

◇

難を逃れた一万五千有余人は、昇天した貴い三柱のめい福を祈ると同時に温い手と心　そして励の鐘で次の速かなることを祈ろうではないか

◇

◇

◇

＜資料７＞　十勝沖地震の記憶　（床潭地区児童・生徒の作文）

『町報あっけし』第11号（昭和27年３月15日発行）の床潭地区児童・生徒の作文より
（※内容については、旧字体を新字体に変更するなど、一部、読みやすく改変・修正しています）

「おそろしい日」　床潭小学校六年　中村キヨミ

あの日、３月４日はとても暖かい小春日よりでした。誰があんな大きな恐ろしい地震と津波が来ると考えていたでしょう。

ちょうど一時間目が終わった10時20分頃突然ぐらぐらと地震がきました。たいしたことが無いと思ったその時つづけさまに歩けない程の地震がきたのです。お友達は皆きゃきゃと言いながら逃げました。「大丈夫だ」という先生らしい声も聞こえましたが、学校が今倒れるか、今倒れるかと思って靴もはかずに夢中で飛び出しました。校庭に出てからも、暫く校舎がゆれてたので私はすっかり、大きな学校がゆれているのを見ました。今考えてみてもこわくなります。

ようやく地震が終わったので机の上に、そのままにしていた本や帳面を教室に入って片付けたいと思いましたが何だかまた地震が来るようでとても中に入る気はしませんでした。男のお友達が皆中に入って、本などをしまっていると、先生がきて「皆校庭に出るように」と言いました。その時またぐらぐらと地震がきました。思わず飛び出そうとした時校庭にいた友達の誰かが「津波だ」と叫びました。まさかと思って海の方を見ると、村の人達が皆大声を出して逃げて行きます。私も皆と一緒に山をめがけて、はだしのまま逃げました。前を走る人も後を走る人も誰が誰だかわかりません。後を振りかえると、私の家の脇から大きな発動機船が大きな波に浮かされて「ごう」「ごう」という音とともにものすごい速さで来るのが見えました。「はっ」と思った時私は何かにつまづいて駐在所の後でころんでしまいました。誰かが私の上を踏んで行ったような気がしましたがすぐ飛び起きて夢中で山に上がりました。その時はもう息が苦しくて何が何やらわかりませんでした。その内に友達が皆集まって来ました。先生も来て居られます。その時学校の方を見てびっくりしました。今まで立派に建っていた家がもうありません。思わず私の家の方を見ると屋根が見えます。ほっと安心しました。私の近くにいるお母さん達は皆泣いています。私もお母さんがとても心配になりました。誰かに聞いてみようと思った時「きよみ」「きよみ」と呼んだので振りむくとお母さんが来ていました。お母さんも靴をはいていませんでした。私はどうなるのかと思うととても悲しくなりました。

夕方になってお母さんと家にきてみると外はなんともないが中はめちゃめちゃでした。障子は破れ、畳はあちこちに流れて布団も着物も食べ物も皆家の隅の方にかたまっています。勉強道具はと思ってお母さんを見ると何も言わずに気の抜けたように立っていました。その夜は濡れていない毛布等を持って親せきの家に行って山に小屋を建てて寝ました。寒い寒い夜でした。私はお友達のことを考えてみながら知らず知らずのうちに寝てしまいました。

▌「地震と津波の思い出」　床潭小学校４年生　菅谷健造

２時間がおわったので、僕は靴下をぬいで、足をあぶっていたら急にガタガタと音をたてて動く。それは地震であった。その動き方というのはものすごく、僕は目がまわった。目がまわってはだしになっているのもしらなかった。ようやく終わったから勉強道具を取りに入った。道具を抱えて外にでていったら家がどうなっているかということが心配になってきた。走って行って見たら水桶はひっくりかえり棚からは物が落ちているのを見てびっくりした。父さんが「健造、地震が来たら逃げるんだよ」と教えてくれた。学校のグランドに来て見たら先生が「もうなんともないだろうから中に入ろう」とおっしゃったその時「津波だ」と誰かが叫んだ。僕はそれっと逃げ出した。見る間に家は倒れてしまった。僕は途中まで行くと家の父さんや兄さんのことを思い出して今頃どうしているのかと思っていたら、母さんが火葬場の所に来ていた。皆が走れ走れと言うので、こわいのを我慢して走った。だけど勉強道具だけは、はなさなかった。海の方を見たら家が２、３軒倒れたようだった。山の登り口に家の八十七のお婆さんがすわっていたので下りて来て連れて上がった。そして良い所にお婆さんをすわらせた。その隣りにどこかのおばさんが「あぼ死んでかわいそうだなあ」と言っていた。うちの母さんは「本当に気の毒だねぇ」と言った。そして、おばさんは「のり子、お前の家はないんだ、どうするの」と言ったら、久保田ののりちゃんは「くすん、くすん」と泣き出した。母さんは「なに泣かなくてもいい」と言っていた。ちょっとしてから、しまださんの父さんが「おばさん、健造、うちのこのむしろの小屋に入って寝れ」と言ってくれたので僕はうれしくてたまらなかった。

急ごしらえした小屋があちこちにできはじめました。

▌「災害に寄せて」　床潭中学校２年　多田武義

３月４日、ちょうど時間は10時25分頃でした。僕らが数学の授業をしていた時、突然地震がやって来た。

僕の後の磯田君に「地震でないか」と聞いた時はもうすでに大きな地震があった。窓から飛び降りたが地震はますます大きくなった。僕は家に帰ろうと思って歩いたが、地面が大きくゆれて少しも歩けませんでした。そのうちに地震も弱まっていったので、先生方と地震の話をいろいろと話し合っていたら、また地震がやって来た。窓から飛び降りようと思って窓に上がったら、すでに校庭の近くに津波がやって来ていた。はだしで逃げては雪があるので、冷たいと思って玄関に長靴を持って出たら、もうすでに家が2、3軒流されていた。それを見た僕は驚いて走れなかった。住宅の方に向かって走ったのだが、波はすでに橋をこえて来た。住宅の方に走れば波にあうと思って、また思いなおして皆の方へ逃げた。皆川さんの方へ走っていったが、途中何回転んだかわかりません。皆川さんの山に上って下を見おろしたら船が２、３艘沼の上に押し流されていた。それを見た僕は驚いてその場で少し休んでいたら、皆が「帰る、帰る」と言うので先生の許しを受けないで家に帰った。家には母や子供達が山に逃げて誰もいなかった。兄さんは町に出て今帰ったばかりなので、家の様子はまだ知らないようだった。兄さんと僕と二人で家の中を見たら、あまりのいたましさに涙がこぼれそうになった。家の中には雪が畳の上に約２尺位も流れ積もっていた。そうこうしている内に日は暮れかかっていた。我が家は外以上にすごく荒れていて、二目と見られない姿になってしまった。家の中で寝ることもできず山に小屋を建てて野宿した。その夜は昼の津波のことを話し合って過ごし、少し休んだが寒くて眠られない。山の下で明け方の静けさを破って元気よく鶏が鳴き出した。小屋の隙間から空を見たら、東の方が白々と明けかけていた。近くでストーブをたいているのか、近くの辺りの小屋から煙がはき出ていた。

今思うとあの時のことがいろいろと思い出され、ぞっとするくらいである。

十勝沖地震（昭和27年３月４日発生）**に伴う**
厚岸町床潭地区の津波被害聞き取り座談会記録報告書

発　行　令和２年３月
発行者　北海道厚岸町教育委員会